


読書推進運動


 公益社団法人
読書推進運動協議会
 〒101-0051
 東京都千代田区神田神保町1-32
 出版クラブビル6階
 TEL 03(5244)5270
 FAX 03(5244)5271
 発行人 小塚 昌弘
 編集人 片岡 伸子
 定価 60円
会員の購読料は
会費の中に含まれる

No.626

- ★「こどもの読書週間」「読書週間」標語決定(8頁)
- ★野間読書推進賞受賞者の活動報告(5頁)



年頭所感

読む楽しさ、知る喜びをみなさまと

公益社団法人 読書推進運動協議会 会長
 株式会社 講談社 代表取締役社長
野間省伸

野間省伸

あけましておめでとうござ
います。

本年は、読書推進運動協
 会の主要な事業のひとつであ
 る「野間読書推進賞」が、記
 念すべき第50回を迎えます。

「野間読書推進賞」は、「読
 書週間」の関連行事として
 1971年に創設されたもの
 で、地域や職域などにおいて、
 読書の普及に永年尽力し、読
 書推進運動に貢献してこれら
 た団体および個人を顕彰して
 まいりました。

前回までの受賞者はあわせ
 て29にのぼります。これまで
 多くのすばらしい受賞者の
 方々を顕彰することができま
 したのも、毎回、全国から候
 補者のご推薦をいただきませ
 関係諸機関・関係者のみなさ
 ま、ご選考くださいます選考

委員の先生方、そして読書活
動に携わるすべての方々のご
協力ののおかげであると、あら
ためて御礼申し上げます。

例年「野間読書推進賞」贈

呈式で受賞者の方のご挨拶を
 おうかがいするので、み
 なさん読書会での発表や、読
 み聞かせを実践していらっ
 しゃるだけに、まずお声がす
 ばらしい。それからご自身の
 本への思いや、読書のおもし
 ろさを広く伝えていこうとす
 る熱いお気持ちも伝わってき
 て、聞いているほうも元気が
 もらえます。

読書推進運動がこうした

方々や団体の地道な活動に支
 えられていることが実感さ
 れ、たいへん心強く感じまし
 た。私どもは今後もこの賞を
 通じて、本と読者の出会いを

助け、読書の楽しさおもしろ
 さを伝える活動を応援してま
 いたいと存じます。

昨年12月のはじめに、経済
 開発協力機構(OECD)か
 ら2018年の「学習到達度
 調査」(PIISA)の結果が
 発表され、日本は「読解力」
 の分野で平均点が12点下落
 し、順位も前々回5位、前回
 8位から15位に後退したこと
 が報じられました。

この調査は3年ごとに実施
 されているもので、日本から
 は高校1年生約6100人が
 参加したとのことですが、結
 果は前記のとおりです。

今回のテストはコンピュー
 タ上で出題・回答するもので
 はありましたが、紙、デジタ
 ルを問わず、基本的な読解力
 は必要です。書き手の意図を

もって構成された長文を読み
 こなす力を、読書の習慣を通
 じて養っていただけけるよう
 に、読進協としても尽力して
 いきたいと思っております。

また、読進協がこの春に展
 開予定の第62回「こどもの読
 書週間」の標語は「出会え
 たね。とびつぎりの1冊に。」
 に決まりました。今年も、ご
 好評をいただいている荒井良
 二さんの鮮やかな彩色のイラ
 ストを素材に、杉浦康平さん
 のデザインで子どもたちに注
 目してもらえよう楽しい
 ポスターを制作いたします。

秋の第74回「読書週間」の
 標語は「ラストページまで駆
 け抜けて」です。この標語を
 もとに4月からポスター用の
 イラストを公募いたします。
 こちらのポスターも毎年個性
 的なイラストが採用され、「読
 書週間」を盛りあげてくれ
 ています。今年はどうのよう
 な作品が選ばれるか楽しみで
 す。
 新しい年のみなさまのご多
 幸とご健勝を心よりお祈りし
 て、新年のご挨拶とさせていただきます。

「2019年度読書推進運動協議会 全体事業委員会」

今年の活動報告と 来季への課題を検証

2019年12月10日(火)、東京都千代田区の出版クラブビルで、公益社団法人読書推進運動協議会の2019年度全体事業委員会が開催された。

運動協議会の主だった事業について報告が行われた。

秋の「第74回 読書週間」の標語選定事業委員会が開かれ、あわせて3600点を超える応募作の中から、それぞれ5次におよぶ投票・選考の結果、入選作が決定した(詳しくは別掲記事を参照)。

「第61回 こどもの読書週間」の標語は「ドは読書のドト」。ポスターは今度も、好評をいただいている荒井良二さんのイラスト、杉浦康平さんのデザインで制作し、6万部を配布した。10月には「行事報告」を刊行。今年の行事主催者数は過去最高の1981件だった。

全体事業委員会では、まず事務局から、2019年度の読書推進

「第73回 読書週間」の標語は「お

かえり、栞の場所待ってるよ」。ポスターは6万7000部を印刷、配布した。また期間中、各道府県読書推進運動協議会に行事補助金を贈呈。各読進協からの推薦に基づいた「全国優良読書グループ表彰」では36団体に賞状・副賞を贈呈した。

「第49回 野間読書推進賞」は9月13日に選考会、11月6日に贈呈式・祝賀会を開催し、団体2件、個人2名を顕彰した。

14万3000部印刷した「敬老の日読書のすすめ」リーフレット

は希望者が多く、残部なし。「若い人に贈る読書のすすめ」リーフレットは10月16日に書目



「読書週間」「こどもの読書週間」ではさまざまな取り組みが活発に(写真は滋賀県草津市)

決定し、21万部を印刷、12月より配布している。

『2018年度版 全国読書グループ総覧』は、専門の研究者の考察や「読書推進運動協議会の60年」などを掲載した記念号として現在編集中。2019年度中の刊行を予定している。

報告終了後は、来年度の事業委員会運営について議論を行った。齋藤健司委員長より、「野間読書推進賞」第1次選考会担当委員の増員の提案があり、実現に向けて検討することとした。

最後に事務局から2020年度事業委員会の開催日程を報告し、了承された。

絵本ワールドinみえ

気軽に行ける 手作り感覚の絵本ワールド

三重県の県庁所在地・津市で、街の基礎を築いた武將・藤室高虎にちなんで年2回行われている、地域活性化イベント「高虎栗座」。

2019年11月2日(土)、56回目を数えるその会場内では、日本児童図書出版協会、子どもの読書推進

会議などが参加した「絵本ワールドinみえ」第2回わくわくえほんひろば」が開催された。街の中心部「フェニックス通り」の一角に設置されたテントには、好天にも恵まれて多くの人がやってきた。

「子どもの本大展示」のコーナーには2000冊の絵本が並べら



武將スタイルでティラノサウルスと記念撮影

れ、親子連れが思い思いに本を手にとっていた。「2019津クイーン」のふたりも忙しいステージの合間に絵本を見に来てくれた。

またテント内のブースや周辺では、子どもたちを対象にしたさまざまなイベントも開催された。

なかでも宮西達也さんのシリーズ絵本の人気キャラクター、ティラノサウルスの着ぐるみとの撮影会には、多くの子どもたちが行列をつくった。

そのほかにも、Tupera Tupera 作の絵本『パンダ銭湯』にちなんで、会場に隠された12のアイテムを探す「パンダ銭湯を探せ!」や、その場でトリックアートが作れる「作って不思議!? トリックアート工作」などが行われた。

14~15時に開催された「自由にネコの絵本をつくっちゃおう!」では、子どもたちがネコやいろいろな動物の下絵に色を塗り、切り抜いて、色紙の台紙に貼りつけて文字を書き、好きなタイトルをつけて、世界に1冊しかない自分だけの絵本を作って楽しんだ。

■絵本ワールドinにいがた

小さな動物の世界を語る いわむらかずおさんの講演会

2019年11月17日(日)、新潟県新潟市の朱鷺メッセで「絵本ワールドinにいがた 2019 (主催 新潟日報社)」が開催された。「福祉・介護・健康フェア」が同時開催されたこともあって、多く人が訪れた。



講演会後のサイン会で
いわむらかずおさん

主人公にしたことについて、「小さな世界をクロスアップして描きたかった」からだと答えた。

そして、自宅の周りで見かけるヒメネズミ、アカネズミ、カヤネズミ、ハタネズミ、クマネズミなどの生態について教えてくれた。

ホールでは午後1時半から、自然が豊かな栃木県益子町で暮しながら創作を続けている絵本作家・いわむらかずおさんの特別講演会「絵本と自然と子ども」が行われた。いわむらかずおさんは1983年から描き続けている代表作の『14ひきのシリーズ』でネズミを

もうひとつの代表作である『トガリ山のぼうけんシリーズ』の主人公のトガリネズミは、実際にはモグラの仲間だが、恐竜の時代からしぶとく生き残っていて、のべつ幕なしものを食べていないと死んでしまうことや、腹部から強烈な臭いを出すことなどの特徴がもしろくで描いたと語った。そして最後に、自作の『ゆうだちの森』『かんがえるカエルくん』から1章ずつを朗読してくれた。

『赤のお部屋』から「紫のお部屋」まで、7か所にわかれたイベント会場では、新潟県立大学の先生や学生による「新聞紙と布でつくるクリスマスリース」「紙コップでつくるキラキラ万華鏡」「割りばしマジックハンド&パチンコ」「箱コロめいろ」、イラストレーター



多彩なワークショップ、おはなし会も
人気を集めた

あだちあさみさんの「こねこねキャンドルづくり」のほか、「メッセージカード」「踊るはらぺこあおむし」「フルート」「リングヒコキ」「かんたん折紙」などの多彩なワークショップが開催され、子どもたちが一生懸命に取り組んだ。

ほかにも公共図書館ごとのボランティアサークルや地域の読書グループなどによる、読み聞かせや紙芝居などの実演が楽しく行われた。

会場の一角で開かれた「子どもの本大展示」では、3000冊の絵本を展示販売。多くの家族連れが本を選んでいった。また講演を終えたばかりのいわむらかずおさんのサイン会も行われ、100名の読者が行列をつくった。

■絵本図書館ネットワーク

子どもの読書活動関係者の 交流の場を目指してのシンポジウム

2019年12月21日(土)、東京都千代田区の東京国際フォーラム会議室で「子どもの読書活動推進に関する代表者シンポジウム (主催 絵本図書館ネットワーク)」が開催された。

このシンポジウムは、国の「第四次子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」を受け、子どもの読書への関心を高める取り組みについて情報を交換し、たがいの連携につなげていくことを目的として企画された。専修大学教授の野口武悟さんをコーディネーターに、パネリストとして日本図

書館協会の森西さん、児童文学評論家で野間読書推進賞選考委員の野上暁さん、家読推進プロジェクトの岡崎忠昭さん、子ども司書推進プロジェクトのアンドリュウ・デュアーさん、アニメシオン黒木秀子事務所の黒木秀子さんが登壇。それぞれの立場から子どもの読書推進の取り組み、そのためのバックアップ事業を紹介。図書館スタッフの研修プログラム、ゆるやかに設定された「ノーマメディアデー」、子ども同士の興味関心を交換することで読書への関心を高める「子ども司書」などの実践が報告された。また、国や自治体に対して、計画の実行につながる予算措置を求める声もあがった。

記念講演はノンフィクション作家柳田邦男さん「地域に根をおろす絵本活動〜最近の事例とこれから〜」。取材活動や読み聞かせ活動などでのエピソードを紹介し、絵本文化のすばらしさ、大切さを紹介した。



野上暁さんは近年の野間読書推進賞
受賞者の活動も紹介

その後、パネリストと参加者による情報交流会が開かれた。

■テーマ「令和の新时代を拓く図書館〜常若のくじからの発信〜」

全国図書館大会 三重大会に、伊賀忍者参上！

日本図書館協会 常務理事 鈴木 隆

伊賀忍者の里に近い三重県津市で、11月21日・22日、全国図書館大会が開催された。2013年の福岡県大会以来6年ぶりに東京以外の開催となった。

1日目、晴天、参加者は63人で、全体会場までの通路には三重県内公共・大学等図書館の紹介パネルが展示されている。

開会式では、大会会長の鈴木英敏 三重県知事、日本図書館協会 小田光宏 理事長のあいさつ、前葉泰幸 津市市長の歓迎のことばで、参加者を迎えた。



日本図書館協会 小田理事長の基調報告

来賓祝辞で、文部科学省総合教政策局地域学習推進課 水田功課長が大臣祝辞の代読を、国立国会図書館 坂田和光 副館長には祝辞をいただいた。日本図書館協会 建築賞の表彰では、大分県の竹田市立図書館と福岡県の西南学院大学図書館が受賞し、受賞館のパネルもホール外に展示された。

基調報告では、小田理事長の軽妙な話とパワーポイント資料で、図書館のこの一年をふりかえり、今後を報告した。

記念講演は三重大学の古丸雄哉教授で「忍者研究の最前線から地域と図書館を考える」がテーマ。講演前に5分ほど忍者ショーがあり、演技者に伊賀忍者の未磨の方もいて、動きがシャープだった。教授の講演のなかで、日常的な忍者の暮らしや忍者研究についての紹介と、その研究にも図書館や古文書の存在が不可欠ということを実感した。

全体会の最後に来年度開催予定の兒玉佳世子 和歌山県立図書館

長から参加の要請があった。

ホールを出ると、忍者研究の一端が展示された古文書の前や日本図書館協会のブースにも参加者が集まった。

懇親会は参加者の大半が参加したような賑わいで、三重県の地酒やブラックカレーが供される。さまざまな場所で話の華が咲いている。司会者に指名されたみなさんのあいさつや忍者ショーが演じられ、さらに迫力を増した。盛会であつた。

2日目は、朝7時30分より津駅から総合文化センター間を3台のシャトルバスがフル回転した。会場の三重県総合文化センターは今年25周年で、館内のガラスに利用者などのことは直接貼付され、それを読みまわる楽しみは、会場が一冊の本のようだ。残念ながら雨模様で、広場中央付近のキツチンカーは、人出の面やや気の毒な感じだった。

午前は7つの分科会が開催された。大学・短大・高専図書館の「震

災と図書館」のテーマは、午後の図書館災害とともに、台風15号や19号の被災もあり、時宜になつたものとなった。図書館の自由では「図書館利用とプライバシー保護」をテーマに、「デジタルネットワーク環境における図書館利用のプライバシー保護ガイドライン」の概要解説などが行われた。関連行事の県立図書館閲覧室の見学が午後の分科会開催前に行われ、常設展「三重の文学を見渡す」にも足を運ぶ参加者があつた。

展示コーナーでは、協会ブース、史料から見る忍者の諸相「展などとともに、三重のどこわコーナー、学校図書館分科会関連の「R本」と「R研」展示、児童サービス分科会の布のえほん展示を行った。図書館の自由分科会からは「何でも読める 自由に読める」を、図書館友の会全国連絡会は「市民の図書館は市民が作る」をテーマに活動やその到達点など展示した。協賛展示として、8法人が書籍や動画などを提供した。

午後は、12の分科会が行われた。公共図書館では、「地域×書店×図書館」をテーマに、まんがやまちの本棚作り、大学図書館の学生サポーターなどの報告がされた。また、目録では昨年12月に刊行さ



各地・各施設の実践報告を共有する分科会 (写真は児童サービス分科会)

れた「日本目録規則(一〇一八年版)(NCR2018)に焦点をあて、委員会報告と、実装への見通しについて各機関から報告がされた。「NCRの歴史の中で最大の変化をとげた版」という分科会概要のことばを実感する会となった。

分科会が終わるころはすでに夜の帳が下り、竹細工の照明が美しい「たけあかり」がシャトルバスに乗り込む参加者を見送つた。

午前・午後の分科会の参加者は、のべ1653人で、2日間あわせて、1114人の参加があつた。実行委員会事務局の方がじつによく動かれ、全体会、分科会ともみごとな対応だった。ひさびさの地方大会は大成功という声を多く聞いた。持ち帰るものが多い大会となつたように思う。

■野間読書推進賞受賞者の活動報告

仲間と継いだ伝承あそびをこれからも……

グループわらべ(岩手県遠野市) 佐々木文子

「むがーす、あつたずもな」民話のふるさと遠野で40年間、継承活動している「グループわらべ」です。以前は小さな農村だった遠野は岩手県のほぼ中央、民俗学者柳田国男の『遠野物語』により昔話や伝説がいまも生きています。人口2万7千弱の市です。遠野という地名は遠野盆地とも言います、アイヌ語のトーンツップ(沼のあるところ)に由来しているとの説もあり、文字を持たなかったアイヌ民族が伝承で昔話を語り継いできた歴史と、どこかつながるところがあるかもしれません。

私たちはともと、社会教育の補助を受けながら「婦人ボランティア」としてお手玉、竹遊び、地域の伝承遊び、絵本の読み聞かせ、遠野の昔話づくり紙芝居、遠野いろはかるた、縄の輪投げ、屋外遊び、わらべ歌など、さまざまな継承ボランティア活動をしてきました。1988年4月に自主活動の「グループわらべ」として独立、現在にいたっています。



ユニフォームとオープニングで使う「カップ手ぶくろ人形」で準備万端!

活動の理念は、ふるさとに伝える遊びを子どもたちに伝えながら、心の豊かさと創造性を育むことです。活動の根底には「民話のふるさと遠野」にふさわしく、先人にならない、遠野に伝わってきたものを大切に守り、次世代にも残していきたいという願いがあります。活動の対象者は、乳幼児から高齢者までです。具体的な活動を紹介します。遠野市は子育て支援に力を入れています。「子育てするなら遠野推進事業」のブックスタート事業

に協力して、1歳児健康相談会場で絵本の読み聞かせを行い、家族に本の読み聞かせの大切さを伝えています。乳児は字を読めなくても絵を見せるだけで、なにかを感じとり、絵本とおはなができています。ブックスタートは、本好き好きの子どもが多くなりますようにお手伝いしています。遠野の昔話を題材にした大型紙芝居を自主制作し、読み聞かせをしています。絵が大きいと迫力がありますので、遠野市主催の「わらすつこまつり」や、小学校の総合学習授業では生徒の人気者です。子どもたちは昔遊びのお手玉、竹遊びも、喜んでくれ、楽しいふれあいの場づくりになっています。高齢者施設訪問では、昔遊びは懐かしいものとして喜んでくれます。私たちの方がお手玉歌や遊び方を教えてもらうこともありま

す。竹遊びも教えてもらいました。それをほかの活動に活かすなど、継承活動になっています。「グループわらべ」の活動は、乳幼児から高齢者まで地域一体となり、遠野に伝わる民話を通して心のふれあい・結びつきができていくと信じています。その架け橋役をしつかりしてゆきたいです。これらの活動の結果、多くの表彰をいただきました。なかでも、2016年11月の野間読書推進賞は、さらなる励みとなっています。受賞の際に今後の活動として人形劇についてお話ししたいでした。それから3年も経ちましたが、このたびやっと、完成しました。人形ができてから題目をみんな考えて、おじいさんとおばあさんの出てくる昔話で、笑いのある昔話をと、『若返りの水』に決めました。おじいさんが滝の水を飲んで若くなったのを見て、おばあさんも飲んだら飲み過ぎて、赤ん坊になつてしまったという話で、若者と赤ん坊が登場人物に加え、4体の人形劇となりました。人形は作った人に似るといつて、笑いながらみんな演じています。2月に小学校訪問です。人形たちを連れていきます。喜んでくれる子どもたちの顔が早く見たいです。2月は遠野市民の舞台ファンタジーがあります。託児ボランティアア付きです。舞台と観客がひとつになり遠野の物語を演じる大行事



会員の面影を宿す(?)人形たちと笑いを届けていきます

で、この日はいつも見守ってくれている神々も観客席に来ているそうです。民話のふるさと遠野の悲しい話、不思議な話、ビックリする話、そんな数々のおはなしを、私たちは紙芝居や人形劇、そして伝承遊びを通して継承していく活動を今後も続けていきたいと思えます。赤ちゃんから高齢者まで世代を超えた数々の笑いがありますよう……頭の「むがーす、あつたずもな」は、遠野の語り部さんが語りはじめるときにならず言う、出だしのことばです。私たちもこのことばを忘れることなく、これからも地域の人たちのぬくもりを励みに、遠野で語りついでいきたいです。どんどはれ(おわり)。

●「どんどはれ」は薬仕事をしながら昔話を語り、終わったときに体についた薬を手で払ったことから生まれたことばだそうです。

優良読書グループの歩み (1)

2019年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。
(順不同)

図書ボランティア「たんぽぽの会」

代表者 高橋 則子

岩手県花巻市

〈推薦〉
岩手県読書推進運動協議会

花巻市大迫町は、岩手県のほぼ中央に位置し、北上高地の主峰早池峰山の麓の農山村です。早池峰山は、高山植物の咲き誇る百名山で有名。町では、ぶどうとワインが名産。早池峰神楽は1976年、国の重要無形民俗文化財に指定され、2009年にユネスコの無形文化遺産に登録されました。たんぽぽの会は「だれにでもできることを、できるときに自主的に活動をする」をモットーとしています。そして、地域住民が読書に親しみ豊かな人間になるために、地域で読書環境作りの一環として図書ボランティア活動を行ってきました。

2005年5月、町内の有志で

発足。老若男女30名、年齢は20代から70代でのスタートでした。

年1回の総会で、年間活動計画を話しあいます。運営委員会は年5回、必要に応じて開催。活動の準備や内容を話しあいます。

発足当時から大迫高校が団体会員となっていて、一緒にボランティア活動をしています。大迫図書館と連携し、大型紙芝居を2作、夏・冬休みの2日間で作製。高校生が手がけた作品を高校の文化祭で発表し、全校で見てもらいます。

2007年には、県教育振興大会で発表、高校生ボランティアの活躍が目立ちました。地域のイベント「大迫宿場の雛まつり」でも毎年発表しています。

ブックスタートでの絵本の読み聞かせや、町内の保育園2園に年2回訪問し、小学校3校へは朝読書で月2回、放課後教室で月2回、本や大型紙芝居の読み聞かせに出かけています。紙芝居を見た子は大型の絵におどろき、方言による読み聞き入り、自分もやってみ

たいと話してくれます。2009年からは、大迫小学校3年生の児童全員が宿場の雛まつりイベントで発表するようになり、現在も観光客に喜ばれています。

会員は月1回の公演「神楽の日」

の前座や、老人保健施設などへの読み聞かせに年10回ほど大型紙芝居を持参して読んでいます。お年よりの方々には絵と話で昔を懐かしみながら聞いてくれます。現在、50話の大型紙芝居を、多くの地域のみなさんに楽しんでいただいています。

忙しい現代、情報化の進んだいま、人の声で、心地よく話を聞く心のゆとりが大事だと思つて活動しています。



地域の文化遺産「早池峰神楽」を読み聞かせて紹介

読書会 杜りん

代表者 森田久美子

埼玉県ふじみ野市

〈推薦〉
埼玉県読書推進運動協議会

大井図書館を中心に居住する顔馴染みの仲間が自然に声掛けあい、「読書会 杜りん」が産声をあげたのは2012年2月9日でした。

現在会員は9名で、月1回、第3木曜日を楽しみに図書館に集います。会員がぜひにと推薦する本を定例会までに読み、感想を持ちより語りあいます。同じ本でも読後感はそのそれぞれで、自分と違った角度からの話は参考となり、かたよりがちな視野が広がったり、いままで手にする事のなかった分野に興味を持てる喜びは醍醐味です。時事話題も飛び交い、午後2時〜4時の2時間があつという間に過ぎていきます。

長く読書会が続けられた理由は、全員で同じ本を同時に手にできることです。会員の希望する推薦本が集められないときは、県立熊谷図書館の「貸出文庫新着案内」から予約しています。この貸出文庫から新刊に出会えるのが最大の



同じ本を読む楽しさをみんなであちあち

喜びです。

会を重ねていくうちに、読書の楽しさを地域の人に広げ会員募集ができたらと思いい、2017年よりポスターを図書館ロビーの定位置に掲示して、定例会日時と今月と来月の本の紹介を載せています。会員のひとりがポスターに短い感想とお薦めの一文を載せるシステムもスムーズに回転するようになりました。入会希望者には見学してもらい、納得してから入会してもらっています。

年に一度の「図書館まつり」にも参加しました。いままでに読んだ93冊の本の一覧表を壁面に掲示し、その本を陳列しました。

忙しい会員同士ですが、ときに

は食事会を開き、好きな本の話から時事話題へとおしゃべりを楽しみ、心のオアシスとなっています。

とくに最近では天災も加わったりで暗い悲しい事件が重なる時世ですが、こけむす杜にりとかすかな鈴の音が感じられるような「読書会杜りん」を今後も続けていきたいと思えます。

8年もの長い間続いてきたのも、担当の司書の方はじめ職員の方々の協力の賜物と感謝するばかりです。

絵本読み聞かせの会

ぐりとぐら

代表者 堀口 寛子

岡山県赤磐市

岡山県読書推進運動協議会
〈推薦〉

私たちのグループは1998年、公民館講座を受講した4人ではじまりました。「本が好き」「絵本を通じて子どもたちに未来へつながるワクワク感を届けたい」、そんな思いから、第一歩を踏み出しました。

現在の構成員は6名。月1回の定例会で、絵本や音楽その他の情報交換や、さまざまなお話し会に向けての話しいや準備を行っ

ています。

活動場所は、図書館・公民館・保育園・幼稚園・小中学校・書店・高齢者施設など。実施先で出会った喜ぶ顔を励みに、小さな活動を続けてきました。

もっとも大切にしていることは「絵本本来の味わいを共有すること」。紙芝居あり、パネルシアターあり、エプロンシアターあり、工作ありと、いくつかの分野を組みあわせて実施しています。

「本選び」には、いろいろな悩みが浮上ります。でも、「おもしろかった」とか「もう一度読んで」の声に押されて、子どもたちのニコニコ顔に出会うときが、いちばんの喜びです。平成から令和へと時代が変わっても、心に響く一冊を届けていきたいと思えます。

取り組むひとりひとりには、それぞれ絵本への思いがあります。育ってきた背景や年代が異なれば、選ぶ絵本にも差が生じるのは当然です。が、出会いたいのは子どもたち、高齢者たちの笑顔です。活字ばなれの昨今だからこそ、「読んでもらった幸せ」に端を発し、「つぎは自分で読んでみよう」と一冊を手にとってくれたら、これ以上うれしいことはありません。読み聞かせを続けていて思うこ

と、それは、いわゆるロングセラーの作品も大切にしたいということ

です。年間膨大な書籍が出版され、かわる私たちは、それについていくだけでも、たいへんな努力です。その中で、取捨選択をし、かつ、長い間読み継がれてきた本の価値も確実に伝えていきたいものです。それが、私たちの務めではないでしょうか。

布の絵本制作ボランティア「布つ子」

代表者 西岡貴代子

福岡県嘉穂郡桂川町

福岡県読書推進運動協議会
〈推薦〉

布の絵本制作ボランティア「布つ子」は、桂川町立図書館のボランティア団体として、布の絵本やパネルシアター、エプロンシアター、タペストリーの制作を行い、お話し会で読み聞かせを実践しています。

「布つ子」は、公民館図書室主催の布の絵本講座終了後に、有志が集まって「忘れられている昔ばなしのよさを子どもたちに伝えたい」という想いで活動を始めたことをきっかけに、発足以来20年間、活動を続けています。

制作には、古い着物をよく使います。その場面にあつた生地を選び縫っていきませんが、できあがった作品は、紙にはないあたたかさ、やさしさが感じられます。

また、作品は出版社より制作許可をいただき、原本に忠実に制作しています。2017年に絵本作家のきむらゆういち氏が講演に来られたとき、われわれが制作した3冊の布の絵本より『いいこいいこ』をプレゼントしました。「講演に持って行ってよいですか」とたいへん喜んでいただきました。

布の絵本のほかに布遊具も制作しており、お菓子の家、魚釣り、的あて、ケーキ、ボウリングなどの作品があります。ケーキでお誕

生会をしたり、魚釣りで魚が釣れたりするたびに、子どもたちの歓声があがります。

桂川町の図書館まつりの第1回目では、「地雷よりもお花をください」をヒントに、来場者がタペストリーに一針ずつ入れる「一針体験」を実施し、丘を走る子ども周りに、コスモスの花を咲かせました。以降、毎年課題を決めてタペストリーを制作しています。10年前から参加している「ふくおかッずずな フェスティバル」とあわせて、一針体験の参加者は、もうすぐ1万人を越えます。また、参加者へのプレゼント「布で作った千支のストラップ」はたいへん人気があります。

このたび、第11回「手づくり布の絵本全国コンクール」(桐生市手づくり布の絵本全国コンクール実行委員会主催)において、『さるとかに』が「織物のまち大賞(最優秀作品)」に選ばれました。

制作は月曜日から金曜日の14時から16時まで。自分のできる範囲で、無理をせず活動をしています。会員も次第に高齢化してきましたが、子どもたちの読書推進のために布の絵本のあたたかさ、やさしさを伝えるため、仲間たちと活動を続けていきたいと思えます。



布の絵本・おもちゃのやさしさで子どもと本を結ぶ



標語決定!

2020 第62回

「こどもの読書週間」

出会えたね。とびっきりの1冊に。

2020 第74回

「読書週間」

ラストページまで駆け抜けて

2019年12月10日(火)、公益社団法人 読書推進運動協議会の「こどもの読書週間」および「読書週間」標語選定事業委員会(出席22名)が開催され、「2020 第62回 こどもの読書週間」と「2020 第74回 読書週間」の標語が決定しました。

第62回「こどもの読書週間」標語の応募総数は、一般・会員各社あわせて1647点。うち47点を選考対象としました。第74回「読書週間」標語の応募総数は2029点。うち50点が選考対象となりました。

選定委員会では「こどもの読書週間」標語、「読書週間」標語の順で協議。どちらも、事業委員による数回の投票で作品を絞り、推薦の弁などを加えて、最終的に各委員の一票投票によって、入選作品を決定しました。

ご応募されたみなさん、社内の応募作をとりまとめたいただいた会員各社の担当者のみなさん、ありがとうございました。

李 佳欣さん(講談社) たくさん知ってる

第62回「こどもの読書週間」標語の応募総数は、一般・会員各社あわせて1647点。うち47点を選考対象としました。第74回「読書週間」標語の応募総数は2029点。うち50点が選考対象となりました。

選定委員会では「こどもの読書週間」標語、「読書週間」標語の順で協議。どちらも、事業委員による数回の投票で作品を絞り、推薦の弁などを加えて、最終的に各委員の一票投票によって、入選作品を決定しました。

ご応募されたみなさん、社内の応募作をとりまとめたいただいた会員各社の担当者のみなさん、ありがとうございました。

李 佳欣さん(講談社) たくさん知ってる

事務局報告(12月)

- ・5日「造本装幀コンクール実行委員会」に出席
- ・9日「第41回サントリー学芸賞贈呈式」に出席
- ☆9日「機関紙『読書推進運動』62号入稿」
- ☆10日「2019年度全体事業委員会」および「第62回 こどもの読書週間標語選定事業委員会」、「第74回 読書週間標語選定事業委員会」開催
- ☆10日「機関紙『読書推進運動』62号責了」
- ・11日「日本児童図書出版協会「年末感謝の会」に出席
- ・12日「上野の森 親子ブックフェスタ」運営委員会に出席
- ・11日「とよたかずひこさんより「子ども読書の日ポスター」イラスト受け取り
- ☆13日「機関紙『読書推進運動』62号出来」
- ・13日「プラス・アイに「子ども読書の日ポスター」デザイン依頼
- ・17日「第72回 野間文芸賞ほか贈呈式」に出席
- ・18日「講談社長委員会に出席
- ・18日「日本書店商業組合連合会「出版販売年大懇親会」に出席
- ・21日「子どもの読書活動推進に関する代表者シンポジウム」に出席
- ☆24日「第62回 こどもの読書週間」ポスターについて杉浦康平事務所と打ち合わせ
- ・24日「とよたかずひこさんと「子ども読書の日ポスター」について打ち合わせ
- ☆25日「若い人に贈る読書のすすめ」リーフレット年内発送分交付締め切り
- ・25日「図書館を使った調べる学習コンクール」(図書館振興財団主催)審査会に出席
- ・27日「とよたかずひこさんと「子ども読書の日ポスター」について打ち合わせ

編集部 & 事務局のひとこと

● 新年あけましておめでとうございませう。

● 昨年末に、近くの図書館へ行きました。カウンター前には「本の福袋」。読書週間・こどもの読書週間の行事報告で知ってはいましたが、実物を目にするのは、なんとはじめて。これは借りてみなければ!

● 大人用と子ども用、それぞれテーマが表示された紺色の紙袋には、図書館スタッフが選んだ本が3冊入っているとのこと。子ども用は学年別にさらにわかれていたようですが、私が見たときにはほとんど借りられていて、細かい区分がわからず。いちばん気になったテーマは、子ども用の袋だったのですが、子どもの読書の芽を摘んではいけないと自重し、年齢相応の袋から選ぶことに。

● テーマはわかっているけれど中身は不明のものを選ぶのはむしろかしく、悩むことしばしば。結局、干支にちなんだ「ねずみ」の袋を借りることにしてカウンターへ。ん? 中身が見えない状態でどうやって貸出の処理をするのかな? と思っていたら、福袋に入っている本のバーコードリスタが登場。これは行事報告ではわからないワクワクです。

● 本を読む楽しみはもとより、選ぶ楽しみ、聞く喜び、本がある場所でも過ごす安らぎなども、読書の味わいは多種多様な機関紙という性質上、本紙面ではむずかしいのですが、特集ページやこのコーナーで、みなさんと読書のワクワクを共有できるように心がける一年にしたいと、思います。

(伸)